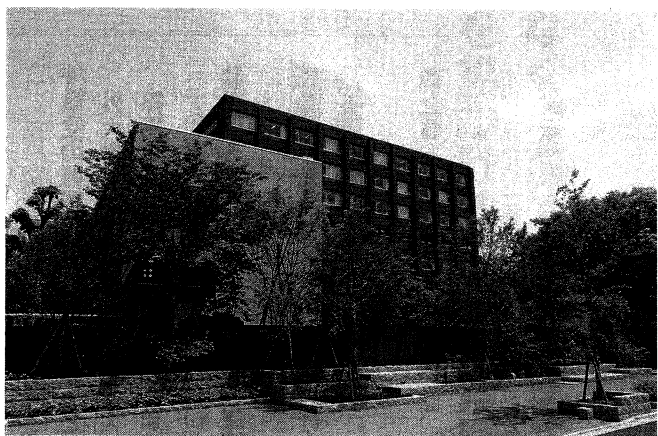


自己の利益だけを 追求するのではなく 社会に寄与する グローバル人材を育てる

・中田大成教頭先生(国際バカロレア日本アドバイザー委員会委員)



20年の改革を経て、また新たなステージが始まる同校に注目が集まります。

これからの私学は こう変わる! 海城

下の学年に行くほど 関心が高い海外大学進学

同校が今年開いた海外大学進学についての講演会。中高全学年が対象でしたが、中田大成教頭先生は参加者数を「せいせい40人くらいかな」と、予想していたを越えて、ところが、ふたを開けてみると118家族、200名弱が集まったのです。「ほとんどが中3以下でした。下の学年になるほど海外大学への関心が高まっています。帰国生入試の1期生も中3になり、来年には高1が上がります。海外大学への進学を目標にするとなると、日本とは入試制度が違うので高1から指導を始めなけ

れば手遅れになる可能性があります。海外大学への進学指導については、これからもっと充実させていきます」

同校が帰国生の受け入れを始めたのは2011年度のこと。定員は30名。入学後は別枠の帰国生クラスを設けず、最初から一般学級に均等に振り分けていくのが特徴です。

「世界中のさまざまな生活体験や学習体験を持った子どもたちと、日本国内で育った子どもたちと一緒にすること。これによって、体験を共有させて多様な価値観や文化の存在をお互いに気づかせていく学習環境を設定しています」

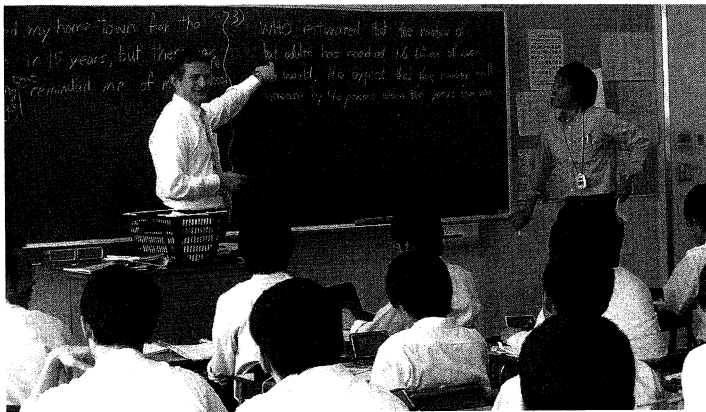
新たな 取り組みを進める 「グローバル教育部」を発足

その翌年、2012年度には「グローバル教育部」を発足させました。その役割は五つあります。

一つは帰国生の支援。遅れがちな国語や社会、逆に力のある英語といった教科指導やメンタルをサポートしていくものです。

二つ目は、一般生徒の英語学習のモチベーションの向上です。今年、新たに中2で2泊3日の英語漬けの合宿を行います。場所は長野県の菅平です。「今回は希望制ですが、全体の

ネイティブ教員と日本人教員のチームティーチングによって実施されている高3英語ライティングの授業



1年間、海外に留学したい」というような生徒も出てきました。高校での留学では、復学の際、単位を認めるように内規も変えました」

四つ目が海外大学への進学指導の充実です。

「高1で海外進学ガイダンスを開きます。さらには、どんな大学に行きたいのか、そのためにどんな準備が必要か、個別カウンセリングも実施します。一番大切なのはエッセイライティングです。そのためにはボランティア活動などの裏づけが必要です。担当職員の人材確保も含めて準備を進めています」

五つ目がグローバル教育を深めていくこと。

「政治やビジネスでは常に何らかの価値評価や判断に基づいて決定していかなければなりません。例えばシンガポールでグローバル企業の最先端で働いている人は、いちいち本国に指示を仰ぐゆとりはありません。プシない判断基準が必要なのです。その拠り所になるのがリベラルアーツです。時代と空間を超えた古典文学や哲学、宗教の中にこそ、人間の普遍性や一般性にかかわる知見があります。最先端の場所でも古い部分が目まぐるしく変わっています」

PISA水準を すでにクリア 次なる改革のステージへ

そこで、放課後の講習で一般教養系の講座を増やしているそうです。

「いろいろな海外の学校をリサーチしましたが、世界有数のインターナショナルスクールに行くと、社会に貢献しようというバブリックマインドの教育が徹底しています。そうした教育を受けた子どもたちが海外の名門大学に進学していくのです。稼いだ金を自分のポケットに入れるだけのグローバル戦士をいから育てても意味がないと思っています」

同校の改革は、今に始まったことではありません。さかのぼること20年以上前の創立百周年の翌年1992年を改革元年と位置づけているそうです。

「当時からそれなりに東京大に合格者を出していましたが、入学後に燃え尽き症候群のようになつてしまふ卒業生がいました。もう一度「国家・社会に有為な人材を育成する」という建学の精神に立ち返って、現代社会で活躍する人材を育成したいと考えました」

改革に際して同校が打ち出し

たのは、新しい学力観でした。

「従来型の学力とは、教科書に象徴されるような系統立った知識を先ずは頭の中に収めて、必要なときに早く正確に取り出せる力です。つまり知識獲得型の能力でした。ところが、もはやこの能力だけでは立ち行かなくなりました。その理由の一つは日本が課題先進国になったことです。少子高齢化は恐らく世界で最も速いスピードで進んでいくでしょう。それを解決するための処方箋を他国に求めることはもはやできません。自ら問題を解決する能力が必要です」

20年に及ぶ改革の結果、同校の教育水準はヨーロッパ市民に必要とされるPISA(国際学習到達度調査)のレベルを遙かに超えていると専門家にも認められたそうです。そして改革の次なるステージがグローバル人材の育成なのです。そのために参考になっているのがIBプログラムです。

「IB資格を取得するための、日本語プログラムの導入が発表されました。本校は積極的に情報収集していきます」

従来型の「進学校」という殻を打ち破る取り組みがいよいよ同校で本格化します。新しいかたち「進学校」に注目です。

その先の夢の描き方

3分の1の生徒の申し込みがありました」

三つ目が海外研修です。これまでも中3では米国、高1では英国で各30名規模の研修を実施していましたが、このところ100名以上の申し込みがあり、抽選せざるを得ない状況です。

「この1〜2年のうちに少し研修の数を増やしたいと思っています。それも従来とは違ったものを構想しています。『中学で